講演　　【右近の町のクリスマス】

皆さんは、「高山右近」について、どの程度のことをご存じなのでしょうか。

高山右近が、高槻城主だったのは、今から約430年前の、1573年から1585年までの12年間でした。
430年前、高山右近が高槻城主だった頃の高槻は、どのような様子だったのでしょうか。
又、どのようにして、〈クリスマス〉が祝われていたのでしょうか。

高槻についていいますと、キリスト教の［三大祝祭日］の一つ、〈復活祭〉につきましては、盛大に祝われた様子が、フロイス他、当時の宣教師たちの記録として、くわしく書き記されています。
もう一つの、教会が誕生したことをお祝いする日でもある〈聖霊降臨日・ペンテコステ〉についても、高槻において、荘厳な行列が催され、祝われた様子が、書き記されています。

しかし、今一番知りたい〈クリスマス〉については、記録が残されていません。しかし、その頃、他の場所でクリスマスが祝われた様子については、記録がありますので、それらを参考にしながら、430年前の、高槻での〈クリスマス〉・「右近の町のクリスマス」を、再現してみたいと思います。

さて、皆さんは、〈クリスマス〉と言えば、何を思い浮かべられるでしょうか？
クリスマスツリー、サンタクロース、となかい、そり、クリスマスリース、クリスマスカード、クリスマスキャロル・その中でも、とりわけ有名な「きよしこの夜」や「もろびとこぞりて」の賛美歌、クリスマスプレゼント、クリスマスディナー　・・・・・　などなど、でしょうか。

〈クリスマス〉そのものは、４世紀後半から、毎年祝われるようになりました。

12月25日にお祝いしたという、世界で一番古い記録は、西暦336年までさかのぼることが出来ます。
“336年のローマの行事”を書き記している「フィロカルスの暦」というのがありますが、その中に次のように書かれています。
「12月25日に、キリストは、ユダヤのベツレヘムでお生まれになった。」 そのように、書き記されています。

正確に言いますと、「12月25日」が、イエス・キリストの誕生日だということは、聖書の中には、いっさい書かれていません。
むしろ、キリストが誕生された夜に、羊飼いたちが、外敵から羊を守るために、ま夜中も寝ないで、番をしていたことが書かれていますから、その時期は、12月のような寒い冬のことではなさそうだ、と思われるのです。

〈サンタクロース〉は、聖ニコラウスがモデルになっているようです。この方は、４世紀の人です。
皆さんが思いつかれるサンタクロースの姿は、アメリカの漫画家トマス・ナストという人が描いた絵がもとになっています。

トナカイやそりについては、どうでしょうか？
1822年のクリスマス・イブに、アメリカの詩人クレメント・ムーアという人が、自分の子どもたちに、「クリスマスの前の夜」という詩を書きました。
“物音で目を覚ましたお父さんが、窓から外を見ますと、サンタクロースがそりに乗って、夜空を飛んできた。”という詩です。この、そりを引くのが8頭のトナカイなのです。
この詩がとても楽しくて、みんなに親しまれるようになり、サンタクロースの乗り物は、“トナカイが引くそり”が当たり前になりました。

〈クリスマス・キャロル〉 とりわけ有名な「きよしこの夜」
この曲の作詞は、オーストリアのヨゼフ・モール神父。作曲は、教会のオルガン奏者だったフランツ・グルーバーです。1818年に作られたキャロルですから、今から192年前のものです。

この他、クリスマスカード、クリスマスプレゼント、クリスマスディナーなどなど、どれをとっても、それらはみな、少し前の時代に産み出されたものですから、430年前の、高槻での〈クリスマス〉には、こうしたものは何もなかったのです。

クリスマスツリーも、サンタクロースも、今教会で歌われているクリスマスキャロル、町に流れているクリスマスソングも、又、クリスマスケーキや豪華なクリスマスディナーも、〈クリスマス〉と言えば、皆さんが心に思い浮かべられるものは、何もなかったのです。

きよい、きよい　しずかな、しずかな　クリスマスでした。

2000年前の最初の日の〈クリスマス〉が、ベツレヘムの家畜小屋で、母マリヤとヨセフ、天使たちや羊飼いたちによって、きよく、つつましく祝われたように、静かに、救い主の御降誕を覚え、今や、よきおとずれ（福音）の救いの中に入れられていることを感謝する祝日が、〈クリスマス〉だったようです。

「どちりいな　きりしたん」という、400年前の、1591年に長崎県の加津佐（かづさ）という所で、活字印刷機械によって印刷された、日本文の本があります。「キリシタン版」と言われるものの一つで、キリスト教の教えを、問答形式で、わかりやすくまとめたものです。

その中に、〈クリスマス〉のことが書かれています。
その当時の、そのままの文章で読んでみます。
「ぱすこあ、なたるなどの大きなるゆはひ日には、しんろうなるしょさをやめ、そのゆはひをまもる事、然るべき也。」
“ぱすこあ、あるいは、なたるなどの大きな行事である祝祭日には、常日頃の仕事はやめて、お祝いをする事が、あるべき姿なのです。”―― という意味ですが、アレアレアレ・・・、〈クリスマス〉なんていうことばは、全然出てきませんでしたよね？

実をいいますと、430年前の日本には、〈クリスマス〉なるものは、なかったのです。

〈クリスマス〉というのは、英語です。当時のキリスト教の宣教師たちの多くは、ポルトガル人で、「ポルトガル語」を話しました。
ポルトガル語では、「復活祭」のことは〈ぱすこあ〉、「クリスマス」のことは〈なたる〉と言いました。

「ぱすこあ、なたるなどの大きなる祝ひ日には、心労なる所作をやめ、その祝ひを守る事、然るべき也。」

「ぱすこあ・復活祭」は、主イエス・キリストの復活の喜びを、精一杯、盛大に祝われましたが、「なたる・降誕祭」は、〈ぱすこあ〉とは対照的に、きよく、しずかに、つつましく祝われたようです。

当時の言い方で言えば〈なたる〉なんですが、皆さんには〈クリスマス〉という言い方の方がわかりやすいと思いますので、この後も、〈クリスマス〉という言い方で話をすすめていきたいと思います。

ところで、日本で最初に祝われた〈クリスマス〉は、どのようなもので、いつ、そして場所はどこだったのでしょうか？

450年前の、天文（てんぶん）21年12月９日。西暦でいいますと、1552年12月24日。
実は、この1552年という年は、高山彦五郎・後の高山右近が誕生した年でもあるのですが、1552年12月24日。場所は、山口の司祭館においてです。

この日、宣教師コスメ・デ・トルレスや、宣教師バルタザール・ガーゴたちが、山口の司祭館に日本人のキリシタンたちを招いて、〈クリスマス〉の祝いを催したのです。
修道士のジョアン・フェルナンデスが、神さまの話・デウスの話を人々に聞かせ、日本語に不慣れなために疲れてきますと、ローマ字のわかる日本人信徒の少年が、かわりに朗読していきました。
フェルナンデスと、少年が話をやめますと、日本人キリシタンたちは、もっと神さまの話・創造主（しゅ）の話をしてほしいと、催促しました。

一同は夜を徹して、デウスを賛美し、翌朝、クリスマスの朝にふたたびミサ・礼拝をささげ、説教を聞いたのち、全員に、食事がふるまわれました。
宣教師のトルレスらにとっては、来日して4回目のクリスマスで、それまでも、自分たちでは祝っていたのですが、この日はじめて、日本人のキリシタンたちとともに、祝うことができたのでした。

日本、最初の〈クリスマス〉は、みんなでいっしょに、①神さまの話を聞き、②賛美歌をうたい、③礼拝をささげ、④共に食事をした ——というクリスマスだったのです。

これは、今から450年前のこと。その後、20年たった430年前の高槻で、一体、どのようなクリスマスが祝われたのだろうか、ということを見ていきたいと思っているのですが、この時、高槻城主だったのは「高山右近」です。

さて、そろそろ、いい時刻になってきたようですよ。皆さんを、高山右近が城主だった頃の高槻城内に、案内することにいたしましょう。

今は、429年前の、1581年12月24日の日曜日。日本暦でいいますと、天正９年11月29日の高槻です。
皆さんの想像力を働かせてくださって、目の前にスクリーンをセットして、429年前の、高槻城周辺の様子を写し出してみてください。

今日は、12月24日、クリスマス・イブです。
クリスマスのお祝いは、24日夜のクリスマス・イブから、25日のクリスマスの朝にかけて、すすめられていきますが、城主・高山右近は、この日のために、りっぱな招待状を、各方面の招待客に送っておりました。

クリスマスは、大いなる「祝い日」ですので、高槻城内また城下では、警備などの、どうしてもという仕事以外は、休みになっています。
宣教師たちの報告では、この年、天正９年には、領民２万５千人のうち、１万８千人（72%）がキリシタンでしたから、10人のうち７人までのキリシタンたちが仕事を休みましたら、残り３人の、キリシタンでない人たちも、仕事にはなりません。

遠くからの招待客も、すでに到着されています。

日頃は決して裕福とは言えない、戦国時代のキリシタン達です。でも、この日は、持っている着物の、最上のものを身にまとって、着飾っています。

だんだん、日が暮れてきました。
阪急・高槻市駅の方角から、高槻城内に近づいていってみましょう。
国道171号線の交差点をすぎて、50mほど行った所に、又、交差点がありますね。あそこから、いよいよ、りっぱな幅24mのお堀になります。小学校の、25mプールぐらいの幅の、りっぱなお堀です。

そのお堀にかかっている橋をわたると、そこが「北大手門」で、門番の侍たちの取り調べを受け、許可されて、はじめて城内に入っていくことになります。
城内に入るには、この北大手門と、他に正門というべき東大手門、それに南大手門の、３個所から城内に入るこ

とができました。

いつもは、城内に入るには、厳しいチェックを受けて、初めて入城がゆるされるのですが、今日は「クリスマス・イブ」〈なたるのお祝い日〉ですので、衛兵たちもキリシタンですから、よくわかっていて、厳しい詮議もありません。

多くの町の人たちが、そして城内に住んでいる武士たちが、それぞれに着かざって、教会堂に向かっています。まるで、湧き出してくる泉のように、人々が姿をあらわし、それが幾すじもの川となって、教会堂めざして、流れこんでいくようです。

北大手門を通り、城内に入った皆さんの目には、もう、木造の、大きな教会堂が見えてきています。その教会堂の向こうには、城主・右近たちの生活の場であった、二の丸の建物がありますし、更にその向こうには、三層建の高槻城の本丸が、そびえるように建っていますよ。

現在の「カトリック高槻教会」の前を通り過ぎて、「文化ホール」の辺りまでやってきました。この辺りには、「司祭館」といって、宣教師の人たちのための建物がありました。
日本の、どのような重要人物がやってきても、恥ずかしくないように建てられている、泊まることのできる施設です。

建物の前には、りっぱな庭があって、背の低い木や、いろんな種類の花が植えられています。遠い所から取りよせた、りっぱな庭の石の間には、バラの花が植えられていて、花時には、見事な花を咲かせていたんですよ。

司祭館の前を通って、教会堂のそばまでやってきました。今の野見神社のところです。
教会堂の周りも、大きな庭園になっています。まわりには、椋（むく）の木などの背の高い、美しい木が植えられています。

道のつきあたりには、三つの階段があって、その一番上の部分に、大きな木の十字架が建てられています。
十字架のある辺りにも、囲むようにして、いろんな種類の花が植えられています。
十字架の所をぐるっと回った右手の方には池があって、遠くの方から管を使って、水を引いてきて、その水が池に落ちるようになっています。
池には、魚たちが、ゆったりと泳いでいます。

教会堂や司祭館、庭園、十字架の辺りは、三人のお年寄りのキリシタンの男の人が、仕事として、毎日、整理整頓・掃除をしていますので、どこもごみひとつなく、美しく保たれています。

教会堂の玄関前の広場には、中に入れなくて、あふれた人たちが、中で行われることに耳をそばだてながら、始まりの時を待っています。

玄関の入口の所には、クリスマスの飾りが施されています。
入口の左側の一画には、イエス・キリストの誕生場面をあらわした、ミニチュアの家畜小屋が作られていまして、その辺りにも人々が集まっていて、2000年前の最初のクリスマスの夜の様子を、見る者に思い起こさせてくれています。

会堂の中に入ってみましょう。

この会堂は、高山右近が高槻城主になった明くる年の、1574年（天正２年）に新築されました。
その当時、他の建物で使われていた木材を転用して使う、reuse（リユーズ）するのが普通だったのですが、この会堂建設にあたっては、木材や釘の古い物、又は他に用いた物は一本も使用していません。

それは、「主なる神をあがめ、尊ぶためには、心を新たにするだけではなくて、主のために用いる材料はみんな、新しくしなければならない。」――という思いがあったからです。

使い古したもの、余ったものやいらなくなった物を神にささげる、という考えではなかったのです。

正面の祭壇の辺りは、荏胡麻（えごま）の油をともした大型行灯（あんどん）で照らされ、日溜まりのように明るく輝いています。その手前、畳敷きの大広間には、長押（なげし）・柱と柱をつないでいる水平の部分にさげられた、多くの燭台の明かりに、人々が、大小さまざまな影となって、壁にゆれています。

日も、すっかり暮れました。
鳴りわたる鐘の音が、聞こえてきました。いよいよ、クリスマス・ナタルのお祝いの時が始まるようです。

入口の引き戸が開いて、城主・高山右近と、信徒たちの代表である長老が入ってきました。地味な衣服は目立たず、一見、ごく普通のサムライのようです。
聖堂全体のざわめきが消えていき、人々は居住まいを正して、ていねいに頭を下げ、右近も、人々の礼にていねいに応じながら、祭壇の袖の所まで来て、一同の方に向きをかえ、喜びにあふれた声で言いました。
「ナタル、おめでとうございます！」
そのあいさつに応えて、集まった多くの信徒たちの「ナタル、おめでとうございます！」の声が、会堂内にひびきわたりました。

クリスマス・イブのミサ・礼拝が始められました。
この日のために練習を積んできた少年聖歌隊によって、クリスマスの賛美がうたわれました。
そのきよらかな歌声に、人々は、最初のクリスマスの夜に、天使たちによって歌われた賛美の様子を、思い浮かべたほどです。
「いと高き所に、栄光が、神にあるように。
地の上に、平和が、御心（みこころ）にかなう人々にあるように。」
会衆も声を合わせて、多くの歌をうたい、クリスマスの喜びを、からだいっぱいに表しました。

「主の祈り・パーテルノステル」が、声高らかに祈られました。
その当時のことばのままで、祈ってみることにしましょう。このような祈りでした。
「 てんにます　われらが御（おん）おや。
御名（みな）をたっとまれたまへ。　御代（みよ）きたりたまへ。
天において、おぼしめすままなるごとく、地においても、あらせたまへ。
われらが日々（にちにち）の御やしないを、今日（こんにち）われらに与えたまへ。
われら、人にゆるし申すごとく、われらがとがをゆるしたまへ。
われらを、てんたさん（誘惑）に、はなしたもう事なかれ。
われらを、凶悪より、のがしたまへ。　アーメン　」

聖書が、朗読されていきます。新約聖書・「ルカの福音書」第2章1節から7節のみことばです。
「カイザル・アウグストと申す帝王、諸国民の人数を記すべしとの綸旨（りんし）を出（い）だされければ、シリアの国のクレニオという守護人より、これを始めらるるなり。
しかれば、上下、万民、姓名をあらわさんとて、各々、本国に赴きけるに、ガリラヤのうちナザレの郷（さと）より、ダビデの御（ご）子孫にてましますヨセフ、その姓名を名のり給わんために、ダビデの故郷（ふるさと）なるベツレヘムに上がり、逗留し給ううちに、お産あるべき日数（ひかず）達しければ、若君を儲（もう）け給い、産衣（うぶぎ）に巻き奉り、置かれ申すべき御座（ござ）なければ、牛馬の物喰（は）むために定まりたる、土の窪（くぼ）みたる所に、宿し奉られたるなり。」

パアデレ・神父による説教が始まりました。
「皆さん、もし来世というものがあるとすれば、そこへ行くには、助け手・救い主（ぬし）なくしては、叶わざることです。ですから、聖書が第一に教える所は、救い主のことなのです。
デウス様は、人間をたすけようとされて、1581年前に人間として、生まれ給うたのです。

その次第は、こうです。
ユダヤの国、ダビデ帝王の子孫のマリヤと申せし女人と、ヨセフと申す男に、神は語らい給うたのです。その女人の胎内において、デウス様は、人の世を御身（おんみ）に受けられ、人となり給い、まだ9か月めと申すに、産の紐（ひも）をとき、誕生したもうたのです。
このお方を、イエス・キリストと申すのです。このお方が、人間の助け手・救い主なのです。
イエス・キリストの生まれ給うた所は、といいますと、二人の親、ベツレヘムといえる在所へ行き、宿を求めましたが、得られず、その在所の近い所に、羊などの家畜を飼う洞穴のありけるに行き、そこにて、イエス・キリストは、生まれ給うたのです。
この誕生の日を、【ナタル】といって、私たちキリシタンは、特別大事な祝日として、みんなでお祝いをするのです。」

人々は、語られるひとこと、ひとことを、心に刻みつけるようにして聞きながら、明日の生命さえわからない、厳しい戦国の世に生きる者として、この喜び、この平安に導かれていることを、心から感謝するのでした。

第１回目のミサ・礼拝が終わり、このあとは、皆が楽しみにしている、聖書物語の劇が始まります。演目は、毎年変えられますが、これまでには、「アダムとエバの楽園追放」「ヨセフの一生」「ソロモン王の裁判」などが演じられましたが、特に印象深かったのは、主の御降誕の様子を、詳細に再現したもので、無一物の生まれであるお方が、尊いお方になられた話は、特に、下級の武士や百姓たちに、大きな感銘を与えました。

今年の出し物は、「ノアの箱舟」で、右近の子ども達・十次郎たちも出演します。
正面に、箱舟をかたどった藁舟（わらぶね）が置かれ、デウスのお告げを聞くノア、箱舟に動物たちが積み込まれるようす、藁舟に乗ったノアの一家が洪水の海を漂流し、やがて、ノアが一羽の鳩を放つと、オリーブの葉をくわえて帰ってきたので、洪水が終わったことを悟るのですが、このオリーブの木は、日本には見当たりませんので、楠の葉っぱが使われました。
葉っぱを運ぶ幸福の鳩は、幼い女の子が演じました。

みんな、物語の人物に成り切り、演技は迫真の出来ばえでした。
お芝居は大成功で、みんなが感動して、さかんに拍手を送っていました。
このように、人々は歌い、祈り、説教を聞き、クリスマスの集まりは、日が変わる深夜にまで及びました。
主のご降誕の喜びが、木造の聖堂いっぱいに満ちて、この至福の平和が、この町に、この国に、いつまでも続くようにと、人々は祈るのでした。

最後に、報告がなされました。
「今や日が変わって、ナタルの日を迎えました。改めて、
ナタル、おめでとうございます！
今日の正午、皆さんそれぞれ、何か食べ物・料理などをもって、この場所にお集まりください。
ナタルの愛餐会をいたしましょう。右近様も、結構なご馳走を準備してくださっているようですよ。お楽しみに。
それでは皆さん、気をつけてお帰りください。又、お昼にお会いしましょう。」

右近のクリスマス

① きよく しずかな夜
かいばおけに ねむる イエスさま
家族で祈る 右近のクリスマス
天に栄光 地に平和があるように

② 星の かがやく夜
よい知らせを受けた 羊かい

教会で祈る　右近のクリスマス
天に栄光　地に平和があるように

③　賛美　聞こえる夜
この方こそ　主なる　すくいぬし
世のために祈る　右近のクリスマス
天に栄光　地に平和があるように

以上、430年前の高槻、髙山右近が高槻城主だった頃の高槻で、一体、どのようなクリスマスが祝われたのだろうか、ということを見てまいりました。
高槻でのクリスマスの記録は、残されておりませんが、その頃、他の場所で祝われたクリスマスの様子や、加賀乙彦さんの「高山右近」を参考にしながら、430年前、1581年頃の高槻での〈クリスマス〉「右近の町のクリスマス」を、再現させていただきました。

今日は、ここまでにさせていただきましょう。最後まで、しっかりお読み下さって、ありがとうございました。又、お会いできたら、うれしいです。